

古代信仰から見た万葉集の羈旅歌

The travel and travel-related love poems of the
Manyōshū, and Ancient Japanese Religion

ヘルベルト・プルチョウ*

Abstract

According to the travel and travel-related love poems of the *Manyōshū*, the ancient Japanese distinguished between two types of space: chaos and cosmos or *ara* and *nigi*. These spacial qualities are a direct reflection of a religious dualism which distinguished between chaotic and cosmic deities (*arabugami* and *nigikami*). They are also immediately related to man himself who potentially assumes in his personality the characteristics of the space that surrounds him. Whereas the ontological integrity of man depends on cosmos, it faces the danger of a potential disintegration in chaos. Hence the necessity to transform into a cosmos all chaotic territory where man plans to settle or to temporarily move through.

It follows that the religious, spacial and ontological dualism of *nigi* and *ara* also applies to rest or home and to

* Herbert Plutschow [現職] カリフォルニア大学ロサンゼルス助教授

movement or travel. Home means ontologically "to be", travel means "not to be". In his cosmos, man is likely to observe the laws and rules of society and civilization, whereas in chaos he is likely to become "morally depraved" and to forget all about "home and family".

In this respect, travel away from home was a highly undesirable and potentially dangerous undertaking, carried out, when unavoidable, only under strict observation of religious rituals and taboos. These rituals and taboos were observed by the traveler himself and, at the same time, by his relatives at home. These rituals aimed somewhat less at the physical than at the spiritual well-being of the traveler. Travelers and his relatives often observed these rituals by composing poetry, or accompanied their rituals with the composition of poetry. This fact accounts, I believe, for the relatively large proportion which travel and travel-related poems occupy in the *Manyōshū*.

Manyōshū travel poems often make direct references to the religious rituals and taboos which constituted the occasion for their composition. Also most poems by the travelers were composed at specific geographical locations where the ritual was required. Such places were: rivers, mountain passes, forests, capes, islands, lakes, and ponds, etc.

It is the purpose of this presentation to analyze a number of representative travel poems of the *Manyōshū* in view of the religio-spatial and ontological dualism of *ara* and

nigi and in reference to the places where these poems were composed at. This approach contributes to a better understanding of *Manyōshū* travel poems. This approach also throws light into the problem of the origin of the *utamakura* or famous place in Japanese poetry and into a number of often encountered themes of travel in classical Japanese literature.

万葉集の羈旅歌とそれに関係のある恋の歌をみてゆくと、古代日本人は二重の空間をはっきりと区別していたことがわかります。それは、荒と和——或いはchaosとcosmosの空間です。その空間的な二重性というのは、宗教の二重性にに基づいているわけですが、それによりますと、荒ぶる神は荒の世界を支配し、和の神は和の世界を保護しています。

その空間的・宗教的二重性はまた、人間と密接な関わりを持ち、人は自分を囲む空間の性質に強い影響を受けます。つまり人間の性格というものは、その空間の性質に支配され、変化するわけで、人が荒々しくなったり和やかな性格になったりするの、こういう理由によるものです。

さて、人間の“存在的 integrity”は和によるものであって、荒の世界においてはそれがおびやかされ、崩壊する危険性があります。それゆえ、人間が定住し、或いは通過する全ての荒の空間を、定期的に、またはその都度鎮める必要があります。

以上の論議によれば、荒と和の空間的・宗教的・存在的二重性は、人間が“家に居ること”と、“旅に出ること”に対しても当てはめることができます。すなわち、“家に居ること”は存在論的に to be、“旅に出ること”は not to be の意味を持ちます。和において人は社会と文化の法律或いは規則

を守りますが、荒においては人間は恥を忘れ家庭を忘れる危険性にぶつかります。

その意味において、旅は望ましくなく、危険の多い行動とみなされました。どうしても旅に出なければならない場合には、必ず様々な宗教的儀礼を行い、禁忌を守ることによって初めて、旅は果たされたのでした。その儀礼の根本的な目的は、荒の世界を鎮めそれを一時、和の世界に切り換えることです。

宗教的儀礼と禁忌とは、旅人自身と、和の世界つまり家に残る旅人の家族によって行われましたが、そのような儀礼は旅人の肉体的安全よりはむしろ、精神的安定を目的としていました。

旅人とその身内は多くの場合、歌でもってそういう儀礼を果し、またその儀式に歌を付け加えました。それこそは、万葉集に、羈旅歌及びそれに関係の深い恋の歌の多数存在することを説明するものです。

古典の資料でわかるように、歌はきびしいリズムと、形と、ことばの忌みによって強い力を発揮することができます。言霊ともいうその歌の力は、荒の世界を征服することのできる力ですが、歌の持つこのような力については、古今集の序の中で紀貫之も触れています。

そのような力を持つ歌は、荒の空間を通過する際に、荒を征服し、それを和に変化させるひとつの手段でした。だから歌は旅人の肉体的・精神的安全を保護する守りとしての機能を持っていたわけです。

その一例は、次の歌です。

3253 あしはら 葦原の みづほ 瑞穂の国は かむ 神ながら ことあげ 言挙げぬ国 しか 然れども ことあげ 言挙げわが
する ことさき 事幸く ま さき 真幸く ま 坐せと つみ 恙なく さき 幸く いま 坐さば ありそ なみ 荒磯波 ありて
も こと 見むと もも え なみ ち へ なみ 百重波千重波にしき ことあげ 言挙げすわれ ことあげ 言挙げすわれ

反 歌

3254 し き し ま 磯城島の やまと 日本の国は ことたま 言霊の さき 幸は ふ 国ぞ
ま幸くありこそ

この歌は言霊の力によって荒を征服し、旅人を見送るのに大きな役割を果た

しました。

この歌によって、人が家に居る時、すなわち和の世界を出ないかぎりには神に特別な祈りを捧げなくともよいのですが、和の世界を出る場合には歌の中に潜んでいる聖なる力、いわゆる言霊が必要となることがわかります。

その意味において、万葉集だけでなく日本古典文学の中でそういった見送りの際の歌が非常に多くあるというのは、決して不思議なことではないのです。

万葉集の羈旅歌の中で、旅人が荒を征服する場合の手段として最も多く表されているのは、旅の途中の様々な場所——地点——で、和の世界との精神的な結びつきを確認し、強調することです。

精神的な安定を持続させるため、自分の拠り所を守るために、旅人の心は家に残らなければなりません。次の歌で、そのことがおわかりいただけると思います。

3757 吾が身こそ関山せきざん越えてここにあらめ
心は妹いもに寄りにしものを

旅の途中で守られるべき、このような精神的、しかもきわめて感情的な家との結びつきは旅人と、家に残る者達との相互的な関係でなければなりません。旅をする間、旅人だけが家を恋しく思うのではなく、家で待つ者もまた、旅人の旅の安全を守るためにその人を恋しく思う必要がありました。

このような関係は、万葉集の羈旅歌において最もよくみられるパターンです。

旅人の出発後、家に残る妻や身内の者達の詠む歌は、恋を表現するだけでなく様々な物忌みにも触れます。

そのひとつの物忌みは次の歌でもわかる通り、妻は旅人の留守中、自分の髪も梳かさず掃除もしない、ということです。

4263 梳くしも見じ屋中やぬちも掃はかじ草枕くさまくし旅行く君を
齋いはふと思もひて

旅人との精神的なつながりを保つためのもうひとつの方法は、妻が夫の戻

るまで衣類の紐を解かないことです。例えば、

896 難波津に御船泊てぬと聞え来ば
紐解き放けて立走りせむ

また、もうひとつの方法としては、旅人のふだん寝る枕元に、神に供える聖なる酒の瓶を置いておくことです。

3927 草枕旅ゆく君を幸くあれと齋盆すゑつ
吾が床の辺に

このような儀礼や歌でもって、家に残る者達は旅人と精神的なつながりを保ちながら、旅にある人の安全を祈ります。

万葉集の羈旅歌において、それらの儀礼の描写はしばしば恋の描写と通じます。

次の二つの歌でわかるように、家に残った妻の旅の安全を願う祈りに対して、旅人は感謝の念を持つのが普通でした。

3583 真幸くて妹が齋はば沖つ波
千重に立つとも障あらめやも

4409 家人の齋へにかあらむ平けく
船出はしぬと親に申さね

家に残った者だけでなく、旅人自身も旅の途中で様々な儀礼を行い、歌を詠みました。その儀礼を行った場所について考えることは、万葉集の羈旅歌の理解の上で、とても重要な意味を持ちます。

その儀礼は、旅人が通過する空間の中の独特な場所・地点で行われました。それらの地点は、はっきりした地理的・地形的な性格を持っているのです。それは、国と国との境、それにつながる関所、それから川の渡り、峠、森、岬と島、泉と池、川や道の曲り角等でした。

次に、川の渡りの一例をとりあげてみます。

3128 吾妹子を夢に見え来と大和路の
渡瀬ごとに手向そわがする

旅人は川の渡りのような旅の途中の重要な地点で手向けをし、自分の家と精神的なつながりを確認し、強調します。それゆえに、多くの万葉集の羈旅歌は同時に恋の歌でもあるのです。そのような歌から判断すれば、旅の儀礼には二重の機能がありました。

ひとつは川の渡りのような危険な荒ぶる神を和に切り換えることであり、もう一つは自分の家、いわゆる和の世界とのつながりを求めることです。そういう歌を詠みながら、旅人は荒の空間の通過を安全なものにしたのでした。

峠もまた、危険な地主^{ちしゅ}の神、つまりその土地の守り神の住んでいる所でした。次の歌によれば、峠は荒の空間であることがわかります。

567 手^ては 周防^{いほくにやま}にある磐國山を越えむ日は
手向^{たむけ}よくせよ荒しその道

峠は手向けを必ず要求した場所でした。“峠”が“手向け”から転じた言葉であるように、峠という言葉の持つ意味は、ただの山の道ではなくそこで行われた儀礼そのものを示しています。

旅の儀礼における峠の重要さはまた、峠の枕詞である木綿疊^{ゆふだま}という言葉でわかります。それによると峠は手向けされた楮^{こうそ}の布が何枚も打ち敷かれた場所でした。

手向山ともいわれた相坂山は、そのような関係で次の歌にも歌われています。

1017 木綿疊^{ゆふだま}手向^{たむけ}の山を今日越えて
いづれの野辺^{のべ}に廬^{いぼ}せむわれ

川や峠と関係が深いのは、川とか道の曲り角です。曲り角が何故旅の空間の重要な地点になるかという、それらの場所で旅人は今まで眼^{まなこ}のあたりにしていた我家を見ることができなくなる、すなわち、曲り角を曲ることによって自分の家が視界から消えることが多いからなのです。

だからそういう地点では旅人は家との結びつきを改めて強調する必要があります。

79 天皇の 御命かしくみ 柔びにし 家をおき 隠国の 泊瀬の川に
舟浮けて

わが行く河の川隈の 八十隈おちず 萬度 かへり見つ ……

次の歌もまた、そういう種類の歌の一つです。それによると、三輪山は、家——いわゆる和の空間——を象徴するものであって旅人の魂はそこに強く抛り所を求めています。旅人は三輪山を自安として、自らの旅の経過を見定めるのです。

17 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで
道の隈 い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも
見放けむ山を 情なく雲の 隠さふべしや

道の曲り角において家との直接のつながりは切れ、曲り角ごとにますますそのつながりは遠ざかります。そういう意味において道の曲り角は多くの万葉集の鞍旅歌に歌われているのです。

3240 ……道の隈 八十隈毎に 嘆きつつ わが過ぎ行けば いや遠に 里
離り来ぬ……

同様に海を旅する場合、旅人は旅の途中の全ての島、また海岸沿いの全ての岬を歌に詠みました。一つの例として次の歌がとりあげられます。

3613 海原を八十島隠り来ぬれども

奈良の都は忘れかねども

この歌によれば、道の曲り角と同じように旅人は、眼前の島々をながめだんだんと消え去り遠のいてゆく家を思い出してはその精神的つながりを新たにするわけです。

“手向け”が“峠”になったのと同様に、“いはひ島”はそこで行われた旅の儀礼から名付けられました。そのことは例えば次の歌によっても明らかです。

3637 草枕旅行く人をいはひ島幾代経るまで
齋ひ来にけむ

以上述べた、旅人が歌を詠んだ地点は、地理的にみてどのような特徴を示しているでしょうか。

川、峠、道の曲り角、島と岬などは、地理的にも地形的にも、眼で見て実際にわかる、“かたち”を持った場所だということが、まず一つ。もう一つの重要な特徴は、これらが必ず、一つの空間的な単位の始まり或いは終りにあるということです。例えば山、森、島などは、一つの統一された空間の単位の出発点でもあり、終着点でもあります。

おそらくそれらの場所は地主神の坐す所であって、その地主の神はそこから始まる空間的単位の支配者です。

それらの場所で行われる旅人の儀礼は、そこに坐す荒ぶる神を一時的に和の神に変え、それによってその神の支配する空間の単位の安全な通過を願うためになされるものなのです。だから旅人は、その空間の単位の切れ目ごとに、荒の神を鎮めなければなりません。

最後に、旅人が以上のような旅の儀礼を怠った場合に何がおこるか、幾つか資料を示してこの論を終りにいたしましょう。

旅の儀礼の必要性がだんだん薄れて来た平安時代から、二つのそれに関する説話をとり上げてみます。

その一つは次のようなものでした。

紀貫之が住吉神社に参詣した時のことですが、小さな峠を越えようとした際に突然貫之の馬が前に進もうとしなくなりました。連れの人に聞いて貫之は、強力な神がその峠に坐すことを知り、その神に手向けする必要があるのに気づきました。貫之はその場で歌を詠み馬は再び歩き始めました……。

この、貫之に関する出来事は、実方中將の悲劇的な死を思い出させます。

実方が笠島を通った時に、そこに坐す神を無視して下馬しなかったために彼は馬から落ち死んでしまいました。

この故事を知っていた西行や芭蕉のような後世の詩人達は、だから笠島を通る時はそこに住む神の存在を忘れず、必ず手向けをしたそうです。

これらの二つの話からも、古代における旅の儀礼の必要性は良く理解できることと思います。

討議要旨

ダグラス・ミルズ氏（国文学研究資料館客員教授）から、発表者の論では、旅の歌は旅に出る前、あるいは旅をしながら詠むものであるという印象をうけたが、旅から帰っての歌はないか、またあれば、旅の途中の歌とは性質が異なるものかとの質問があり、発表者より、万葉集の羈旅歌だけからみれば旅に出る以前、また旅の途中での歌が圧倒的に多いと思うとの返答があった。

金用淑氏（東京外国語大学客員教授）から、旅に出た夫のため妻が化粧しないとか、着物の紐を解かないとかすることは、単に儀式的に旅に出た夫を案じての、つまり呪術的な意味をもつだけの行為なのか、それとも妻の側にも何らかの他の意味があって行われた行為なのか、との質問があり、発表者より、それは儀式的、呪術的な意味で行われたと思われるとの返答があった。

アンドレ・デルテイユ氏（パリ第三大学大学院生）よりも若干の質問があった。